

## 「今」この一瞬を生きる

高富中学校3年 大石 結心

医療従事者の方の顔に刻まれた痛々しいマスク跡。この映像を見た瞬間、今、世の中で起きている事態の大きさに、私の心は凍りついた。

2月29日。この日を境に私の生活が真逆になった。学校に行くという当たり前のことが一瞬にして奪われた。学校でみんなと勉強できないこと、友達に会えないこと、仲間と笑い合えないことがこんなにもつらいことなのか。学校が大好きな私にとって、突然の休校はとてもつらく、当たり前の毎日が、実は貴重な時間の積み重ねであったことに気付かされた。

そして、不自由な日々を過ごしていく中で、いつの間にか何をするにも、「コロナさえなければ」「コロナのせいで」という言葉が、私の心の中で何度も繰り返されていた。

そんな時、学校からのメッセージに書かれていた「フライデーオーバーシヨンの」文字が目にとまった。今、不自由な生活をしている反面、お互いに頑張っている人たちもいる。だから、今こそ日本で起きていること、世界で起きていることを正しく知って、真剣に考えるべきではないかと思った。

日々、感染者が増える中で、自分の命の危険と隣り合わせで治療にあたる医療従事者の方々、生きていくために必要な食料品店やドラッグストアで働

く方々、そして、正確な情報を伝えようとするメディアの関係者の方々。新型コロナウイルスの恐怖と向き合いながら、社会のために最前線で闘ってくれているたくさんの方々の存在を知った。その一方で、最前線で闘ってくれる人々や新型コロナウイルス感染者の方々に対し、差別をする悲しい現実があることも知った。私自身も、その立場だったら…と考えると、弱気になって怖くて想像すらできない。命と向き合うことは、本当に難しい問題であることを考えさせられた。

今回の新型コロナウイルスを通して、私たちは何を知り、何を学んでいくべきか、問いかけることが増えた。そして、休校が続く中で私なりにコロナウイルスと向き合い、この現状で私に何ができるのか、どう生きていくべきなのかを考えるようになっていった。

その中で目に入ってきたのが、とても大きく大きな壁にぶつかっても、できることを考え、発信している人々の強く生きる姿と優しさであった。マスク不足で困っている人々のために手作りマスクを届ける人や、マスク製作に動き出す会社、不自由な方々のためにお弁当を作った届ける人々、オンラインでつながり、人々の心を不安から救おうとする人々。たくさんの方々がつ

ながり合って、この困難を乗り越えている。「今」を必死に生きようとする多くの人々の判断力と行動力に心を打たれたと同時に、私もそんな一人の人間でありたいと心から思った。

では、一体私にできることは何だろうか。体育祭も、合唱祭もできないかもしれない。部活も思うようにできない。制限された状況が、つらくないと言ったらうそになる。だからこそ、仕方ないとすぐ諦めるのではなく、今までにない形でできないかと解決策を見出し、行動に移すことができる自分でありたいと思った。そして、学校に行けることに感謝し、学べることに感謝し、最前線で闘ってくれている人々のおかげで生きていられることに感謝し、今を一生懸命生きていきたいと思う。

一人の意志や行動で社会は確実に変わっていく。少し立ち止まって、自分の行動を考えてみよう。相手のことを本気で思いやってみよう。その小さな優しさが、社会に大きな笑顔をもたらすだろう。一歩ずつ、半歩ずつでもいい、手と手を取り合い、心を結び、前向きにかけがえのない「今」を歩んでいきたい。そして、夢ある自分たちの未来を自分たちだからできる新しい形を目指して創り出していきたい。

# 令和2年度 山県市少年の主張大会

市少年の主張大会で優秀賞に輝いた2人の生徒の作品を紹介します。

## 弱い自分に負けるな

高富中学校3年 梶田 夢佳

「早く中学生になりたい。」  
小学校6年生の卒業間近だった私は、これから始まるうとしている中学校生活にそんな憧れを抱いていました。

そして4月。入学式を迎えました。新一年生は148人。大人数にとっても驚きました。友達の名前を覚えるのもひと苦労でした。なぜなら私は、市内でも極めて小さな小学校に通っていたからです。同級生は9人、クラスのほぼ全員が保育園から一緒に、9年来の仲間でした。前向きだった私は、こんなに大勢の学年なら友達を作ろうと意気込んでいました。ところがしばらくして、私はだんだんと中学校が楽しくと思えなくなりました。学校に通うことが正直つらいと思うようになりました。あんなに期待に胸をふくらませていた中学校生活がこんなものかと、まるで期待がどんどん崩れているかのようにでした。それからの日常では、うつむきな私へと変わっていききました。心の中で思っていることを伝えてはいけない、小学校の頃の自分は受け入れられないんだと思いました。

小さい頃から周りに、「はきはきしているね」「大きな声であいさつできてすごいね。」と言われていましたが、この頃から自分の殻に閉じこもるよう

になりました。それに比例するかのように、学習の意欲も失われ、授業の提出物をやりきることも苦痛になってしまいました。ある朝、今日の提出物ができていないから学校に行きたくないと思いを困らせたことがありました。反抗期とも重なり、私は家族に悩みをぶつけることもできませんでした。

夏休みも終わり学校が始まりました。誰かが私のことをボソボソと話していることに気付きました。私は堪えることができませんでした。自分の感情をうまくコントロールすることができなくなり、爆発してしまいました。

「もうどうしたらいいかわからない。」  
そう家族に伝えると涙があふれ出しました。小学校までの9人は、何でも話せる良い点と、慣れ合いになりきつい口調で会話をしても受け入れてもらえないという点がありました。しかし、人数が多くなればなるほど一人一人いろいろな考えを持っています。みんなが自分と同じ考えを持っているわけではありません。

家族から、自分は井の中の蛙だったこと、人の気持ちを考えて行動すること、うそをつかないようにと言われました。そして、家族と一日一回必ず声を出して笑うことを決めました。テレビでも会話でも何でも構いません。笑

顔は、エネルギーへと変わります。  
私はその日から、自分の思いに蓋をすることをやめました。時間はかかりましたが、少しずつ私は昔の自分へと回復していきました。2年生に進級し、明るく楽しい日々へと変化していききました。

これからもたくさんの人たちとの出会いがあるでしょう。今思えば、あの悩んでいた一年は自分が成長していくための大切な日々だったのかもしれない。そして、今の自分がいるのは、家族や先生、友達のおかげです。術後で大変だったのに、私を励まし続けてくれた父、私がどんなにきつい態度で接しても受け入れてくれた母、いつもにこにこ優しい笑顔で話しかけてくれた祖父、私が少しでも元気になるようにと大好きな手料理を作ってくれた祖母、いつも私のそばにいて支えてくれた友達、そして、私を近くで見守ってくださった先生には、感謝してもしきれないほどです。

私は胸を張って言えます。この先もつらいと感じることが何度もあるかもしれませんが、もう大丈夫です。これからは、ポジティブに、前を向いて未来を信じて進んでいきます。